

一筆啓上

作左通信



第百一十四号

平成十二年十月二十二日(日)発行

今年、二〇〇〇年(平成

十二年)のNHK大河ドラ

マは「葵 徳川三代」(ジ

ームス三木原作)。江戸

幕府を確立するまでの家康、

秀忠、家光と続く三代の将

軍の苦悩や葛藤(心の中が

対立する状態)がえがかれ

ています。岡崎市は、家康

生誕地ということで、今、

一躍脚光を浴びています。

以前、「徳川家康」(山

岡庄八原作)が放映された

ときも、家康ブームが起き

ました。そのドラマの中に

は、いつも主君家康に齒に

衣着せぬことを言う本多作

左衛門の姿が、多くえがか
れていました。

作左衛門には、こんなエ
ピソードがあります。

あるとき、人間を煮るの
に適した大釜を見つけた家

康が、それを城へ運ぶよう
に命じました。その後、城

へ運ばれていく釜を見た作
左衛門が人夫たちから事情

を聞いたうえで、釜を打ち
砕いてしまいました。そし

て、「天下を望む者は人を
煮殺したりせぬもの。家康

公には、そのような仕置き
しかできぬのかと作左衛門

が申ししていた、と伝えよ」

と言い捨てて立ち去ってし
まいました。その報告を受
けた家康は、作左衛門の諫
言(いさめる言葉)に赤面
したといいます。

また、次のようなお話も
残っています。

元龜三年(二五七二年)の
冬、武田信玄が多くの軍勢

をしたがえ、京を目指し動

き始めました。浜松城にい

た家康も、三方ヶ原に軍を

出しましたが、兵の数が少

なく大敗しました。家康は

この時、こうさげびました

「これで、わしの運命も終

わった。城にたてこもろう

にも食糧がない。ここで討

ち死にしよう」と。

作左衛門は、すかさず次

のように答えました。

「何と弱気なことを。数十

日ぐらいの食糧なら十分に

たくわえてござる。女、子
供からさえ『鬼作左』と呼
ばれてきたが、それはこの
ような時のためと思つてき
びしくしたのでござる。」
この時、家康は涙が止まら
なかつたと言います。

主君が行き過ぎた時には
厳しく、落ち込んだ時には
叱咤激励。しかし、その中
には作左衛門の家康に対す

る温かい思いやりが感じら
れます。いつの時代にも、

「ご意見番」と呼ばれる人
が必要なのです。

(養文殿 雲居に輝く人々80)

